

## 原始・古代土器棺葬の研究（要旨）

角 南 聡一郎

本研究は、日常土器を棺とした墓のうち、特に弥生・古墳時代に「子供」を埋葬したと考えられるものを対象として、考古学的方法により検討・研究すること目的とした。

「土器棺葬」は、縄文時代後期以降日本列島に登場する葬制である。弥生時代になると、成人用の埋葬専用の大形甕を用いたものと、日常土器を転用した小児用のものに分化し、前者は甕棺墓、後者は土器棺墓と呼ばれるようになる。甕棺墓については、様々な視点から研究が蓄積されてきた。しかし、土器棺葬の研究は、これと比して大規模開発によって資料が蓄積されたにも関わらず、全国規模ではほとんどおこなわれなかった。また、縄文～古墳時代にかけての通時的な視点での研究もおこなわれることは少なかった。先行研究において、埋葬という行為には当時の社会的意味が凝縮されている場合が多いことから、弥生～古墳時代の土器棺は、社会が階層化していく課程で「子供」が集団成員として認められるか否かの根拠として捉えられた。また、「子供」を埋葬したと考えられる小形の石棺や木棺があり、これらの異なる棺の使用はそれぞれの出自の違いと考えられてきた。これらの疑問を解消するべく、以下の方法によって研究をすすめた。

考古学的検討をおこなうためには、まず対象とする出土資料がどこでどのくらい出土しているかを把握することからはじめる必要がある。このため、西日本を中心として日本全国の発掘調査報告書についてできる限り検索を試みた。

また、日本に限らず、中国、韓国、北朝鮮、台湾、フィリピン、インドネシアといった東アジア諸国の土器を棺とした墓についても情報を収集した。つぎに、ここで得られた情報を遺跡名、所在地、遺構名、時期、棺の器種組成、棺の法量、立地、埋葬状態等の項目についてカード化し、データベースを作成した。データは各都道府県別に作成し、必要な情報をできるだけ迅速に引き出せるように努めた。

この作業によって今まで、資料が報告されるのみであった土器棺のデータベースを作成することにより、土器棺葬という葬制レベルで体系的に捉えることが可能となった。

このデータベースを頼りに各地へ赴き、土器棺に使用された土器の実見・熟覧・実測・写真撮影をおこない、被葬者の年齢と棺のサイズの関係を検証を実証的におこなってきた。同時に、各地での研究史の文献を収集に努めた。

以下、第1部では土器棺の基礎的検討をおこない、第2部では近畿地方の具体例を用いてケーススタディーをおこなった。更に、第3部において、土器棺葬を手掛かりに、「子供」の埋葬からみた社会構造論のための試論を述べた。

第1部第1章では、土器棺葬についての研究史をまとめた。これまでの研究史を紐解く作業の結果、土器棺葬には約100年の研究史が存在し、多くの研究や報告が存在することが判明した。しかし、すべての文献を網羅し、土器棺葬全体について学史を把握した研究はこれまでには発表されておらず、個別の研究は歴史の流れの中で埋もれてしまっていた。また、過去の研究では「土器棺墓」「壺棺墓」「甕棺墓」「土器棺葬」「壺棺葬」「甕棺葬」「土器棺」「壺棺」「甕棺」といった用語が乱立しており、「墓制－葬制－葬法」という概念によって明確に用語を定義する必要があることもわかった。

また、土器棺葬の研究は各地域ごと、各時代・時期ごとにおこなわれて

きた感が強く、時間的・空間的に連続性を意識した研究は、一部の環東アジア的視点からおこなわれた研究を除いて皆無である。そこで、土器棺墓の分布の中心である西日本を対象地域として、土器棺墓が多い時期である弥生時代～古墳時代前期までについて検討していく方向性を示した。

第2章では、西日本ではこれまで、きっちりとした土器棺墓の分類が提示されていないことを問題とし、本書で土器棺を検討するための、いくつかの類型を設け分類案を提示した。以下の分類はすべてこれに従った。

第3章は、土器棺と、土器埋納という土器を大地に意図的に埋めるといふ現象面では区別がつきにくい二つの遺構について検討をおこなった。この結果、土器棺と報告されたものの中には実際には土器棺ではないものも含まれている可能性があることが判明した。また土器棺であることを認定するためには蓋の有無と埋葬状態が参考となる点を提示した。この基準により、本書では土器棺と報告された資料でも、疑わしい資料は除外して論を進めた。

第4章は、更に土器棺の被葬者が「子供」であるということを明らかにするため、遺体が棺内に遺存した事例を集成した。遺体の医学的鑑定結果によると、一部の例外はあるものの、土器棺葬されたのは当時の社会で「子供」とされた未成年であることが判明した。

これらの基礎的検討から、土器棺葬こそが原始・古代社会における「子供」の存在を研究するための最善の材料であることがわかった。

第2部では近畿地方を題材として、土器棺葬のケーススタディーをおこなった。弥生時代～古墳時代前期までを通して概観すると同じ近畿地方に所属していても、各地域での様相は大きく異なっていることが看取される。

弥生時代前期段階では、遠賀川式土器の東への波及に伴って、近畿地方でも遠賀川式土器を使用した土器棺葬が生じる。この段階では近畿地方の各地で遠賀川式土器と深く関係した周溝墓や土器棺葬が認められる。特に、周溝墓と関係した土器棺葬が近畿地方で多く発見されていることは注意し

なければならないだろう。近畿地方では稲作開始期における土器棺葬という習俗の受容のされかたは、ほとんど均一であることが窺える。

ところが、弥生時代中期前葉段階になると、近畿地方では土器棺葬がほとんどみられなくなり、実態が不明瞭なものとなる。この段階で、一旦土器棺葬が断絶するかの印象を受けるが、この点については資料数が極めて少ないため、まだ言及できる段階には至っていない。東海地方では、愛知県清洲町朝日遺跡や岐阜県美濃加茂市野笹遺跡など、この時期になってはじめて遠賀川系土器を使用した土器棺葬がおこなわれはじめるようだ。畿内第Ⅱ様式併行期の土器棺葬の検討は今後の課題である。

弥生時代中期中葉～後葉段階は、近畿地方で土器棺葬が盛行する段階である。ほとんどは河内地方の場合は方形周溝墓と関係して埋設される場合が多い。しかし、土器棺が多い地域として注目される播磨地方や丹後地方は、この段階では土器棺葬はほとんどおこなわれていないようだ。しかし、東大阪市瓜生堂遺跡第2号方形周溝墓に象徴されるように、方形周溝墓と土器棺葬は密接に関係している段階といえよう。この段階には近江地方や紀伊地方などの地域でも方形周溝墓に伴った資料が出土しており、この仮説を補強している。

弥生時代後期前～中葉段階になると、河内地方の方形周溝墓が衰退すると共に、土器棺葬の事例は極端に減少していく。この辺りに土器棺葬の第二の画期を設ける必要がある。逆に、この段階に吉備地方の土器棺葬が目立って多くなる。当地は、方形周溝墓が極めて少ない地域である点も興味深い。畿内から吉備地方へと土器棺葬の分布の中心は移行していく段階であると評価できる。

弥生時代後葉段階～古墳時代前期にかけて、吉備地方で盛行した土器棺葬はやや衰退し、その中心は播磨地方、丹後地方、讃岐地方、山陰地方へと地域的に分散しながら展開していく。棺に使用された土器と同様に、各地域において地域差が大きくなり、立地も土器棺のみで墓域を構成するも

のと、墳丘墓や古墳と関係して埋設されるものに大きく分岐していく段階であろう。畿内でも僅かに土器棺葬がおこなわれてはいるものの、かつてのような数は認められなくなる。

以上のように、近畿地方を中心に周辺の地域の動向も含めて、時期別傾向を概観してみた。この結果から、「子供」の埋葬である土器棺葬は、「大人」の墓である周溝墓、墳丘墓、古墳の動向と大きく関係して増減がみられる点が窺えよう。つまり、「子供」の死後、埋葬するのは「大人」であり、そこには「大人」社会の法則が反映されている可能性が高いと考えた。

第3部では、「子供」は死後、「大人」によって埋葬されるという点に留意し、「大人」からみた当時の「子供」観を究明するべく、土器棺葬を巡るいくつかの問題について検討を試み社会構造の復原をおこなった。

副葬品については、土器棺には従来いわれてきたように、副葬品を伴う事例が少ないことを確認した。しかし、全く存在しないのではなく、金属器、石器、ガラス玉、穀物などを副葬する場合も存在することが判った。副葬品を伴う事例は、墳丘墓や古墳上に埋設された土器棺に多いが、弥生時代を通じて、棺内に副葬品を納める事例がある。弥生時代終末～古墳時代前期の事例は、階層性という言葉で片付けられないこともない。しかし、第2部でも言及したが、土器棺葬の在り方は、各時期・各地域で様相が異なり、一概に「子供」の社会的地位が低いとか、「子供」は非社会構成員であるといったことで片付けられない問題を含んでいよう。

また、特に注目したいのは、事例の中に棺の外に伴ったものと棺の中に入っていたものの両者が存在している点であろう。棺内のものは副葬という語義で扱えそうであるが、棺外のもは果たして副葬なのかそれとも供献というべきなのか疑問が残る。もう一点興味深いのは、棺内から炭化物が出土する場合が比較的あるという点である。これは棺内に、穀物・花などを副葬した結果と考えられるが、土器棺に副葬品が伴わないのではなく、

このような有機物が容れられた可能性が高い。このため、調査時に棺内の土をしっかりと調査することが望ましいだろう。

第11章では、口頸部に打ち欠きのある土器棺について、集成と検討をおこなった。資料を検討していく中で、口頸部打ち欠きという行為は、意図的なものであり、短に遺体を収納しやすくするために、口を広げるという単純な構図では理解できないことがわかった。口頸部打ち欠きという行為は打ち欠かれた口頸部が、土器棺の周辺や掘り方から出土することにより、埋葬地でおこなわれたことが判明した。つまりこの事実は、埋葬地まで遺体と棺としての土器を別々に運搬し、埋葬地で「入棺儀礼」をおこなう過程で口頸部打ち欠きという行為がおこなわれたと理解されよう。このような埋葬時にもものの一部を意図的に破砕するという行為は、破砕土器供献や石鏃の先端部を打ち欠く行為、穿孔土器などにもみられ、この点では土器棺に埋葬された「子供」に対して、「大人」と同様に、あるいは匹敵するレベルの葬送儀礼が執りおこなわれたことを示しているといえよう。

壺を使用した口頸部打ち欠きの儀礼は、吉備地方を中心に弥生時代後期のはじめ頃にはじまり、古墳時代前期までみられる。第9章でも述べたように、この時期は土器棺葬の画期といえるため、吉備地方と畿内の関係がここでも再び浮き上がってくる。

第12章では、前章の問題提起を継承した形で、土器棺が他の墓坑を切るという現象に注目し検討をおこなった。このような切り合いを有する土器棺は、弥生時代中期中～後葉にかけては畿内を中心にわずかにみられる。しかし、弥生時代後期前～中葉になると吉備地方を中心に展開し、逆に畿内では全く認められなくなる。弥生時代中期中～後葉の畿内の事例は、方形周溝墓の中心主体である木棺を切っているが、弥生時代後期前～中葉の岡山県下の事例は、集団墓内に存在し土坑墓や木棺墓を切っている。しかし、後期の後葉～終末段階になると、墳丘墓の中心主体を切るものがほとんどとなり、播磨地方や伊予地方、丹後地方でも同様の現象がおきはじめ

る。この状況は古墳時代前期段階にも引き続きみられるようだ。土器棺が土器棺を切ることはほとんどなく、「大人」の墓としての木棺を切る、つまり少しでも距離的・精神的に、死んだ「子供」を「大人」＝祖霊へと近づけたいという埋葬者する側の「大人」の意図が、ここには読み取れるのである。

さらに付章では、台湾で出土した土器棺を現地へ赴き調査をおこない、研究史を整理し集成・検討を実践した。この結果、台湾にも「子供」を埋葬した土器棺が存在することを究明した。

終章では、土器棺葬という思想について環東アジア的視点から人間誕生説話や再生説話と関連付けて考察し、これらの説話と土器棺葬のいずれもが環東アジアに広く分布していることは事実であることなどが土器棺の形状と深く関係している可能性が高いとした。

本研究は主として土器棺葬の基礎的な部分に重きを置きながら検討を進めてきた。したがって、細部の問題や棺に使用された土器自体については言及できていない点が多い。更に古墳時代中・後期の土器棺葬が再び多くみられるが、今回は除外しており、古墳時代前期からの系譜を検討する必要がある。これと関係して、北部九州地方の甕棺墓分布圏が古墳時代後期以降の甕棺墓の衰退とともに、どのような墓制へと変化していき、古墳時代前期の土器棺葬とどのように関係するかも興味深い。また、東アジア的視点による日本と他の国の資料の比較考古学的研究も現在も継続中である。このような現状からすると筆者の土器棺葬の本格的研究は、まだはじまったばかりであると考えている。前述の諸問題については、引き続き研究をおこない成果を発表していく予定である。

考古学は過去の「モノ」を対象とする学問であるが、「学」である以上、現代社会に寄与する成果が必要であり、研究者が「夢」や「ロマン」を売っているだけでは真の学問とはいえないだろう。本研究をおこなっている最中にも、実母が息子を殺害したり、9年間も拉致監禁されていた少女が発

見されたり、家庭内での子供への虐待が問題となったり、といった報道が相次いだ。現代社会においては「子供」が受難的であるケースは非常に多いのではないか。今日、子供の人権も盛んに叫ばれるようになった。本研究での各時代・各地域での「子供」の扱いとは、単に「子供」の歴史の追究ではなく、当時の「子供」がいかに窮地に立たされていたかを解明していく作業でもあった。ペットの墓に多くの金銭をかける現代人からみると、「子供」を墓に祀らず、川へ流すようなことは信じられないことであろう。しかし、その時代においては、これが一般的であったのだ。人工授精により「子供」を授かることも可能となった現在、そしてこれからの「子供」を考えていく上で、「子供」親の歴史から学び過ちを繰り返さないようにすることは大切なのではないだろうか。

また、日本は21世紀を迎えてすぐに全人口に占める高齢者の割合が、世界で最高になると予想されている。これは少子化が影響しており、「子供」の問題は、「老人」・「老い」の社会問題と深く関係している。このような現代の社会問題を反映した考古学、「子供」の考古学や「老いと老人」の考古学が市民権を得ることこそが真の「現在の」考古学であり社会考古学であろう。今後、筆者は「子供」の考古学を確立すべく研究を続けていきたい。

#### 【引用文献】

- 和田千吉 1901「死体埋葬に壙を用いるし事実の研究」『考古界』1-3 考古学会  
 稲葉東園 1910「丹波熊野郡海部発見の瓢形大土器」『東京人類学会雑誌』290 東京人類学会



東京市亦板町ニ於ケル壙埋没ノ圖

第三圖

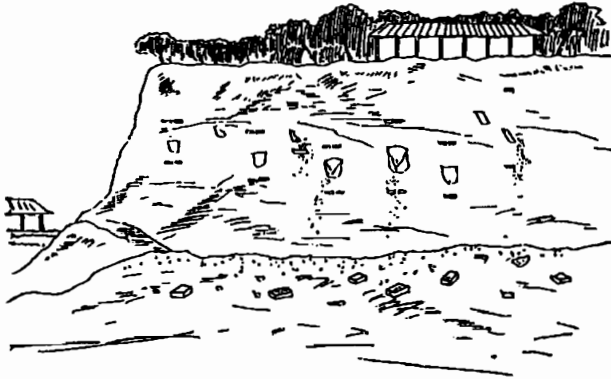


図1 「壙棺」という語のはじまり (和田 1901)

瓢形土器形土器

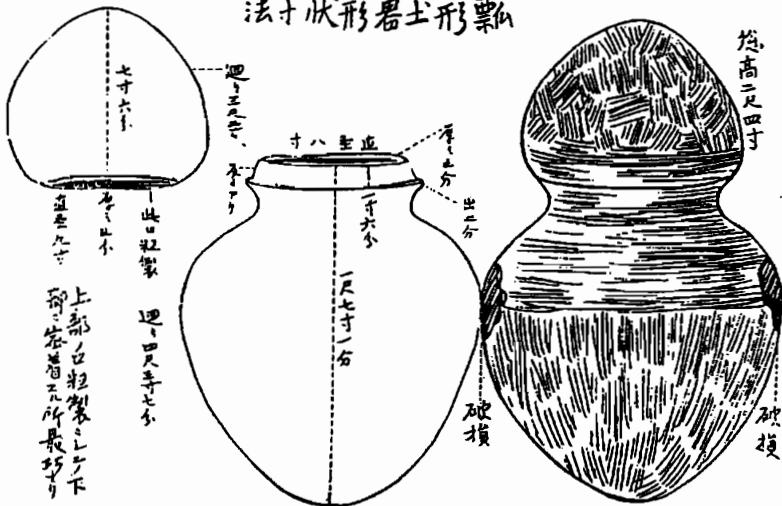


図2 土器棺の「発見」(稲葉 1910)